

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

閃光の軌跡

【作者名】

泡泡

【あらすじ】

トールズ士官学院には貴族と平民と言う身分の違う者たちが兵学を学んでいる。そして今年はそれとは別の身分の者が隠してやって来た。お飾りの理事長の意図を知って……。

この作品は閃の軌跡の創作品となっております。原作崩壊や登場人物の性格が変わったりしていますので、嫌いな方はオススメしません。

プロローグ

エレボニア帝国、帝都近郊北西に位置するカレル離宮

そこは皇族の住まいとなっている美しい離宮だ。そして二人の男性と一人の女性が神妙な面持ちをして会話していた。

「本当にここを出てトールズ士官学校に入学するのかね？」

「あなたがいなくなったら寂しくなるわ。でもあなたが決めたことなのよね？」

「ええ、もう決めたことです。それにオリヴィエ兄さんが作られたとされる組がどのような所なのか。貴族と平民の身分を超えた何かを見てみたいのです。それにアークスの適合も高かったのでそこに入る資格は備えているかと……」

「分かった。私からは言うことはない。名に相応しく行動し、励むように……。とじるで、さきほどからこちらを睨み続けているアルフィンはどうするつもりだ？生半可な理由では納得せぬのではなからうか？」

「ふふっ、私たち以上にあの子は繊細で頑固だけどそれでいて我慢強くないわ。……士官学院に行くまでの間に何を要求されるのかしら……」

「はい。納得するまで話すつもりです。母上もあまり茶化さないでください。「ホン、それでは失礼します。父上と母上」

公式の場ではないにしても礼儀と作法を持ち、そこから立ち去るのは皇位継承者第一位でありながら、世間から隠され続けてきたアマデウス・ライゼ・アルノールだった。庶子であるために継承者からは離れているものの兄弟仲は良好とも言えるオリヴァルトを兄に持ち、妹のアルフィン、弟のセドリックとなっていた。

だが、アマデウスがトールズ士官学院に入校することを喜ぶのではなく、嘆き悲しんだ。理由はいたって簡単。帝都から離れる兄を心配した・・・わけだ。心配されるほど弱くはないが内心焦っていた。肉の兄弟とは言え、親愛の情を抱くほど慕っていたアルフィンは誰か違う女性に兄がなびくのではないか・・・と思っていたわけだ。少しだけアマデウスもアルフィンの気持ちに気付いていたが、血が繋がっていることが最後のラインをわけていた。

「アルー？入るぞー」

一応ノックをしてからとても碎けた話し方をして部屋に入る。そこにはベッドに顔をうずめたアルフィンと、その横で心配そうに見ていた弟セドリックがいた。

「兄上ー。姉は先ほどからこの状態なんです。僕が何を言っても顔をうずめたままです・・・。どうしましょうか？」

「リック。私とアルを二人きりにしてくれないか？終わったらリックの部屋に行くから・・・」

「ええ、そのほうがいいかもしれませんね。分かりました、僕は失礼します」

セドリックが退席したのを確認してからベッドに顔を隠している

アルフィンに近づく。そしてアルフィンの肩を抱き寄せ、こちらを振り向かせた。やはり予想通り、涙を流して目は腫れていた。

「はあ、アル。何回も説明したとおり、何処か遠くに留学するわけではない。同じ帝国内の学院に行くだけの話。どうしてそこまで危惧するんだ？」

「グスツ……。兄様にいさまの意図が分からないのです。皇族であり、ゆくゆくは継承なさる方が士官学院に、しかも身分を隠して入学なさるところに」

「それも言ったはずだ。まあその時には耳をふさいで脱兎していったから聞いていないかもしれないな。もう一度説明するぞ。継承するからといって上から眺めるだけじゃ国民の考えは分からない。それに指図するだけでは動いてくれない。だったら同じ目線に立って行動しなければならぬだろ？身分を隠すのは……。色々とめんどくさい事になりそうだからだ」

「……………」

「分かってくれ。今まで父上と母上が私のことを隠し続けていたことも、狙われないようにするための苦肉の策と聞いている。だから私は力を付けることにした。誰に狙われようともそれを跳ね除けるだけの力を……」

「…………一応、分かりました。それでもお願いが一つあります」

「うん、何かな。(予想は付くけど添い寝を……とか)」

「そ、その……。兄様がツールズ士官学院に行くまでこちらにいます間だけ添い寝を願いたいのですが。駄目……でしょうか？」

涙目で上目遣いをしてこちらの顔を覗き込んでくるアルフィン。予想していたとはいえ、想像以上の破壊力に『うっ』と言葉に詰まりながらも了承するアマデウスだった。

「ああ、いいよ。可愛い妹の頼みなものな。叶えてあげるぞ」

「ありがとうございます、兄様。（大好きです・・・）」

その後、セドリックの部屋に行き妹の納得を得たことを伝え三人で両親に報告することができた。アルフィンが納得することは両親とも心配しておらず、夕食は最初から最後まで楽しく会話が弾むものとなった。

そしてその日からアマデウスがツールズ士官学院に入学するまでの間、アルフィンの横にはアルフィンが敬愛してやまない兄の姿があった。服を握って離さないアルフィンとその様子を愛おしむアマデウスの姿が・・・。セドリックは昼間アマデウスから離れないが夜の間はアルフィンに譲っているようだった。

そして入学のため出発する日の朝

「では行ってきます」

「うむ、体に気を付けるのだぞ」

「ちゃんと親友と思える人を見つけることができましたらいいですね？期待していますわよ」

「・・・・・・・・・・」

彼は出発しようとしていたが、右手をセドリックに左手をアルフィ
ンに握られており足を進ませることが困難な状態に陥っていた。

「アルにリック？ちゃんと納得して私を送り出してくれるんでしょ
？それにアルは学校に遅れるんじゃないのか？リックも家庭教師が
来る時間が迫っているでしょ？」

「今日、休んで兄様を見送りたい・・・」「僕も、兄上の入学式に行
きたい」

「ダメ。二人共行ったら大騒ぎになるでしょ？それに今まで隠し
てくれた両親の気遣いを台無しにする気？優しい二人だったらその
くらいわかるでしょ？」

「・・・・・・・・」

ギュツと手を握る力が強まる。そして諦めたかのように手を離し
てくれた。だから二人の頭を優しく撫で肩に抱いた。

「わかってくれて何より。私は二人の兄さんなんだから、心身とも
に成長してくれるのが一番嬉しいよ。それにオリヴァルト兄さんも
おちゃらけた様子は見せながらも君たちのことをいつも大切にして
くれているし・・・。それは実感しているでしょ？」

「うん・・・」「はい・・・兄様」

「よし、じゃあ二人共行っておいで。私もそろそろ出るから、ね？」

後ろを何度も振り返りつつそれぞれ後にしていった。ふと後ろを
振り返るアマデウス。今気づいたかのように話し始める姿は少しぎ
こちないものが残っていた。

「そうそう、今まで黙って気配を隠していたのには何か訳があるのですか兄さん……?」

「おやおや、気づいてしまっかい？我が弟よ」

そこにはリユートを持って、金色の髪の毛を後ろで束ねている青年が一人立っていた。横には護衛と思われる軍人を連れている。

「ミユリーさんもお疲れ様ですね。兄さん相手だと気の休まる暇が無いでしょ?」

「はっ、正直そうですね。私もアマデウス様が対象であれば……と何度も思ったものです」

「ミユリーさんっ、ドイツ!!」

とよよよ、とワザとらしくくずおれるマネをするオリヴァルト・ライゼ・アルノール。通称“放蕩皇子”。庶子と言っただけの理由で皇位継承者から外されているものの、それを気にすることなく自分の道を見つけることができている青年だ。

「あははは、兄さんも相変わらずだ……」

「それはそうと、今日からだね」

「ええ、兄さんが理事長を務めている学院に入学して、兄さんが追いかけているもの的一端を見つけることができればそれでいいんですけど。あとは……“光の剣匠”に追いつけるだけの武力を磨きたいところですねえ……」

「いや、我が弟の武力は追いついていると思われるが……。それはそうと我が弟君は私の名前を使ってくれるんだね。レンハイムって……」

「はい、呼ばれて気づかなかつたら偽名であるとすぐに予想がついてしまいますから、兄さんのもうひとつの名前のほうであれば分かりやすいと思ひまして……」

「そうか、嬉しい限りだ。だが我が弟君の最終目的が光の剣匠とは……ね」

光の剣匠と言う具体的な目標を述べると引きつったような表情をする兄さんオリヴァルトに首を傾げながら自分の護衛を一人連れて目的の地へと向かうことにした。

「では、兄さん。また会う日まで。ミユラーさんも……」

「フッ、我が弟よ。元気でな」「こちらのごことは心配しないでください」

「では士官学院までの道中よろしく」

「はっ、お任せ下さい」

そう言うのは数年の間ずっと護衛の任に当たっている戦乙女隊ヴァルキリーの一人だった。そして会話という会話も無く士官学校がある街に到着するのであった。

「留守中の事は任せた。緊急の用事以外はそちらで片付けてもらって構わない。あと実家に戻っている時以外は、兄さんが使っていたレンハイムを使うからそのつもりで……」

「かしこまりました。それではアマデウス・レンハイム様でよろしいのですね?」

「変な勘ぐりはされたくないから“様”もいらないんだけどなあ。本名で呼ばなければそれでいいよ。それじゃ行ってくる」

駅前には最新鋭の防弾導力車を停めてそこから歩いていく。自分が使用する得物を持って……。士官学院の門前まで持っていくと行って聞かなかった騎士を止めるのも一苦労だった。堅苦しい会話から想像できないぐらい女性だからだ。これも妹が危惧した問題の一つとも言えるかもしれない。あまり接点は内容に思えるので彼自身は^{おあごと}大事にはしていなかった。

このツールズ士官学院には貴族と平民と言う身分の違いがある男女が兵学を学びにやって来る。今年はそれに加えて皇族が身分を隠して入学した。さて、彼はどのような足跡^{そくせき}を歩むのであろうか。

入学式

トールズ士官学校はかのドライケルス帝が設立したと言われている学校だ。貴族、平民関係なしに入学することができることで知られている。そこには今年から三種類の色をした制服の子らが入学するようだ。

彼が来ている制服の色は赤を特徴とした制服。周りを見渡しても同じ制服を着ているのはかなり少なかった。しかしそんな事にはあまり関心なさそうにさっさと士官学校の門をくぐっていった。

「入学おめでとーございます!!」

「えっ……?」

講堂で開かれるはずの入学式に出ようとしてそちらに注意を集中していたので、声をかけてきた女性に気づかず曖昧な返事を返してしまった。改めてそちらを見ると下級生に見えるぐらいの小柄な女性と、作業着のつなぎを着ている男性がこちらに歩いてきているところだった。

「えっとアマ・レンハイム君?随分、変わった名前ですね?っと、ごめんなさい。こんな事を言うのは失礼ですね。改めてご入学おめでとうございます。ところであなたの荷物を預かりたいのですが……」

その言葉に頷きアマデウスは右手に持っていたジェラルミンケースを地面に置いた。

「重いから気を付けてね?って……!!」

「って、わわっ!!」

と彼が言う前に事態は急変してしまった。地面に置いたアマデウスが軽々持ち運んでいたことも一つの要因かもしれない。それに倣って持ち上げようとした小柄な女性が持ち上げることができずに、そのまま前のめりになりくると一回転して背中から地面に叩きつけられそうになったのだ。

「っ……」

受身を取る時間はない。それならすぐに来るであろう衝撃に備えて目を固く瞑り待つが、待てどもその衝撃は来なかった。何故なら……。

「大丈夫ですか？先輩(?)ってそっかしいんですね……」

ケースの持ち主によって支えられていたからだ。それも一般的に言うお姫様抱っこによって。幸いだったのは入学式が始まる直前だったので、周囲に人影は見られず抱き抱えられている子と抱き抱えている彼と、それを唾然としたふうに眺めている男性だけだったのだ。

「ふええええ……。だ、大丈夫でしゅ!!おろしていただけません?」

「大丈夫なら良かった。さあ、ゆっくりと足をつけて降りてください」

噛み噛みになったことには触れずにゆっくりと割れ物を扱うかのように地面に立たせる。それからその女性の横に立っていた男性に告げる。

「言っのが遅れましたね。このケースの中身はとても重いので運ぶ際は気をつけてください。私が持っていくのが最善なのかもしれないですが、台車に乗せるかしたほうが良さそうです」

と、横で呆然として立っていた作業着を着ている太めの男性に言うことが出来なかった注意点を述べる。

「あ、ああ……。お気遣いありがとうございます。そうさせてもらうよ。なにほともあれ僕からも入学おめでとう。充実した二年間になるといいな」

『はい、それでは……。』とだけ告げると案内された方に向かって歩いて行った。

入学式は普通の学校と大差なく終わりをむかえようとしていた。講堂には朗々とした声が響き渡る。

「最後に君たちに贈る言葉がある。本学院が設立されたのは約220年前のことである。創立者ほかの“ドライケルス大帝”……。 “獅子戦役”を終結させた帝国、中興の祖である。晩年の大帝は兵学や砲術を教える学院を開いた……」

壇上で話しているのはヴァンダイク学院長だ。ステージの下には、教官と思われる数人の男女が直立不動で並んでいた。

アマデウスは何度も聞かされて覚えている話の内容にアクビを噛み殺しながら、講堂に出席している新入生と思われる人たちに意識を向けていた。

「(白を基調としているのは貴族。緑色は平民。……ここまでは分

かるが俺のような赤を基調としているのも幾人かいる……。俺を含めて10……。人か。兄さんが関わっているならそれなりの理由もあるはずだが」

「若者よ 世の礎いしづえとなれ！ワシのほうからは以上である」

壇上では学院長がドライケルス大帝の残した言葉を力強く発していた。

「以上で第215回トールズ士官学院の入学式を終了します。以降は入学案内書に従い、指定されたクラスへ移動すること。以上、解散！」

「指定されたクラスって……」

優しそうな男子が呟く。確かにそうだ。入学案内書にはクラスがどこになるかなど書いてはいなかったのだ。

「はいはい。赤い制服の子達は注目！クラスが分からなくて戸惑っているみたいね。実は事情があったりします。これから君たちには特別オリエンテーリングに参加してもらいます。まっ、すぐに分かるわ。それじゃあ全員あたしについて来て」

そう言つとさっさと講堂から出て行ってしまった。戸惑いつつもそれに従うのは赤い制服を着た男女の生徒たち。

「(何の意図があつて……。とりあえず行ってみるか。おやこちらを睨んでいるのは貴族か。気に入らん……。)」

そのような視線には慣れているアマデウスだったので、そのまま講堂をあとにした。そして数分歩いた後についたのはオリエンテーリ

ングがこれから行なわれるには予想もしなかった旧校舎だった。

オリエンテーリング・前編

「じ、じじって……」

「士官学院の裏手？随分と古い建物だな」

数人の男女から漏れる疑問の声全てをスルーし、教官らしき女性は鼻歌交じりにその古い建物の扉を開ける。そしてそのまま中へ入っていった。その様子にただ啞然としながらも続いて中に入った。9人の男女。最後にアマデウスもその中に入ろうとして後ろを振り返った。木々で全貌を見ることはかなわないが少し小高い丘があり、そこに4人の姿が見えた。そのうちの2人は得物を運んでくれた人っぽかった。もう2人は何かの達人と思われる出で立ちをしておりその眼差しも鋭いものだった。

既に中に入った彼らに遅れることがないように早歩きでその後に従った。そこは今現在使われていない旧校舎らしく何かが出てもおかしくないほどであった。教官らしき女性は講堂のような場所ですテージに上がる。右手を腰に当てて声を出した。

「サラ・バレストイン。今日から君たち 組の担任を務めさせてもらうわ。よろしく願うするわね」

「な、組……!?」

「ふむ、聞いていた話と違うな」

「あ、あのっ。サラ教官？この学院の1学年のクラス数は5つだったと記憶していますが……。それも各自の身分や出身に応じたクラス分けて……」

疑問の声があちらこちらから聞こえてくる。学院では 組と組が貴族。く 組が平民と分けられているからだ。だがここに集められているのは貴族も平民も混同して集められていた。

「おっ、さすが首席入学。よく調べているじゃない。そっ、5つのクラスがあつて貴族と平民で区別されていたわ。あくまで、去年までは、ね。今年からも1つのクラスが新たに立ち上げられることになった。すなわち君たち。身分に関係なく選ばれた特科クラス組が」

「み、身分に関係なくって本当ですか？」

金髪の子が少し大きな声で尋ねる。

「じよ、冗談じゃないっ!! 身分に関係ないって? そんな話は聞いていないですよ!!」

生真面目……という言葉がとても当てはまりそうなメガネをかけた男子が声を荒らげる。どうやら身分の違いに対しても避けがたい壁のようなものでも造っていきそうだった。

「へえ……。確か今、声を荒げている彼の父親は……」

「えっと、確か君は……」

「マキアス・レーグニッツです。それよりも教官。自分はとても納得しかねます。まさか貴族風情と一緒にクラスでやっていけと言っているんですか?」

「うん。そう言われてもね。同じ若者同士なんだからすぐに仲

良く出来るんじゃない？」

それに対して教官は気の抜けた返事を返すだけだ。

「そ、そんなわけないでしょ……」

「フン……」

「君。何か文句でもあるのかね？」

「別に……。平民風情が騒がしいと思っただけだ」

「……どうやら大貴族の御子息殿が紛れ込んでいたようだな。さぞ名のある家柄と見受けるが？」

偶然、貴族の事を毛嫌いしている平民とそれを鼻で笑った貴族が並んでいたようだ。

「ユーシス・アルバレア。覚えてもらわなくて結構」

「!!!」

「東のクロイツェン州を治めるアルバレア公爵家の……」

「なるほど……噂には聞いていたが」

「だ、だからどうした。俺はそんな大層な名前に怯むと思ったら……」

「はいはい、そこまで。色々文句はあると思うけれどそれは後で聞くから。そろそろオリエンテーリングを始めたいから」

やや強引に言い合いになりそうだったのを止めさせた。

「オリエンテーリング……。それって一体何なんですか？」

「もしかして門のところまで預けたものと何か関係が？」

「あら。いい勘しているわね」

と、言つとサラ教官は数歩後ずさりした。そして柱に埋め込まれていたスイッチをさりげなく押した。すると自分たちが立っていた床が斜めにずれ、下方に向かって滑り落ちていった。10人中8人がそのまま何もできずに……。

「やっ」

銀髪の女子はワイヤーを引つ掛けて落下を防ぎ、アマデウスは後方にバックステップをしたので床がずれていないところまで下がるこ
とができた。

「「うらフィー。サボってないであんたも付き合おう。オリエンテー
リングにならないでしょうがっ」

サラ教官はそのワイヤーを切り、フィーと呼ばれた銀髪の女子を同
じように落としていった。

「それで君は……どうして察知出来たのかなあ？えつと名前は……
えっ。アマデウス・レンハイム？」

「ええつと、その類の危険な状況に慣れているんですよ。それと自
分もやはり行かなきゃならないでしょうっか？」

「そうしてもらえるとありがたいわね」

「・・・分かりました。それでは私も行ってきます」

スタツと降り立ったとき、一人の男子が女子からビンタを喰らっているところに遭遇した。修羅場?と思ったが藪をつついて蛇を出さなくなかったのでそのまま放っておいた。

落とされた場所は円形になっており、それぞれの使う得物が石でできた土台に置かれていた。ラストも自分のを探すと地面にケースが置かれておりメモ紙が備え付けられていた。

『ごめんなさい。とても重くて載せることができませんでした』

「すまん、この中には得物じゃなくて違うものが入っていたんだよ。私が使うのはもう手に付けていたんだ。まあケースがいらないうけじゃないんだがな」

特別なクオーツをアークスに装着すると自身と共鳴、同期した証拠として淡い光が灯った。

「それじゃあ始めるとしましょう。そこから先はダンジョン区画になっているわ。割と広めで入り組んでいるから少し迷うかもしれないけど、無事終点までたどり着ければさっきの旧校舎一階に戻ることができるわ。これより士官学院・特科クラス 組の特別オリエンテーリングを開始する」

ユーシスと呼ばれた貴族と、マキアスと呼ばれる眼鏡男子はそのまま罵り合いながら一人で勝手に行動していった。その他は男子と女子で別れて行動し出口を見つけるようだ。フィーと呼ばれる女子だ

けは先行していった。残った女子は女子で行動し、さて男子は……と言つ話の流れになった。

「えっと、君はどうする？」

「ん？私か……。そうだな……。最初は勘を取り戻したいのと、この武器の扱いを思い出す意味で一人になりたいのだが……。ああ、自己紹介だけはしておこうか。さきほど君たちがしていたのは聞こえていたから私の名前を言っておこう。アマデウス・レンハイムだ。まだ今の段階ではクラスメイトになるかどうかは分からないが、その時はよろしく」

「ああ、「ちらり」そよろしく。それでアマデウスの武器は……？」

「この鉄鞭だ。こう言う学校に来るのも初めてなものでな、何を持ってきて来ればいいか迷って倉庫にあったのを持ち出した……。という訳だ」

「へえ、持っている姿は様になってるよ」

「ありがとう。っと、それじゃあ先に行かせてもらつよ」

ほう、と感心したように眺めていた長身の留学生と優しそうな赤髪の少年、それに話しかけてきた黒髪の青年と別れて先に行くことにした。腰に鉄鞭をぶら下げ、手には無詠唱で電撃を飛ばす事ができる手袋をはめて……。

「(ここまで運んでもらっているのにケースの中身はアーツを凝縮したカートリッジが入ってるんだよなあ。今日使おうと思った分はセットしてあるし……。悪かったな、入学式前に会った先輩らしき子に迷惑かけちゃったな)」

右手にはめたソレを眺めながら、飛び出してきた魔物をそのまま屠る。『バチッ』と言う音と共に雷の矢が複数飛び跡形もなく消し去っていった。

彼の持っている鉄鞭の重さは15kg。それを軽々と振り回す様子はそれなりの期間、扱い慣れていることを示していたが彼はそれでは満足しておらずもっと高みに行く事を目指していた。

「む、そなたは……」

「ああ、さっきぶり……でいいのかな」

散策していると出発の時に別れた女子三人組と出会った。朗らかな様子を見せているサラ教官から成績トップで入学した女子生徒、青い長髪のやや古くさい話し方の女子生徒、ラインに平手打ちをしていた女子生徒である。

「うむ、こうして会えたことだし自己紹介でもしておこうか？」

「それがいいかもな。私はアマデウス……アマデウス・レンハイムだ。クラスメイトになったならアマデウスとかアマと呼んでくれ」

「私はラウラ・S・アルゼイド」

「エマです。エマ・ミルステインと言います」

「……アリサ・Rよ。」応よろしく」

「ラウラにエマにアリサね」

失礼の無いように指差しではなく手の平で確認する。

「ところでお主の武器はそれか？」

ラウラがアマテウスの手に握られた得物を指差して言う。その表情は珍しいものを見たような驚いた様子だった。

「うん、あまり見たことないかもしれないが、鉄鞭と言う。鉄製だから shouldn't が、簡単に言つと曲がらない鞭と言つたら分かるかもしれないな。まあそれなりのことはできるつもりだ」

「そうか、ところでこれからどうするつもりだ？一緒に行くか、それとも今までどおりに別々に行動するのか？」

「うん、私としては女子と一緒に行動したいところなんだが……この得物の具合を確かめないといけないのだよ。オリエンテーリングの最後には一緒になるだろうからその時にまた……」

「うむ、そういつ事なら。お主も気をつけるが良い」

女子三人組と別れて、半ば迷宮化している旧校舎の中を彷徨う。

「見事に兄さんは貴族平民を混ぜたものだ。アークス？とやらの適性を重視した結果がこうなるとはね……。ここまでは兄さんも予想していなかっただろうに……」

オリエンテering・後編

「む、そこにいるのは誰か？」

柱の陰に人の気配を感じたのでそちらのほうに声をかけてみる。刺々しい魔獣の気配と違い穏やかな気配なので、そこまでの心配はないものの自分の得物の鉄鞭を構えて警戒はしておく。

「むう…見つかったか。案外鋭いね」

そこにいたのは先程サラ教官によって落とされた時、一緒に落とされなかった銀髪の少女だった。

「君か。確か教官からフィーと呼ばれていたように思うが、それで合っているか？」

「ん、フィー・クラウゼルだよ。フィーでいい。そっちは？」

「アマデウス・レンハイムと言う。よろしく」

「ん、よろしく」

「……………」

初対面同士なのでどうにかして話そうとしても話しは続かない。

「フィーはこのまま出口まで行くのか？ だったら一緒に行かないか？」

「ん、いいよ。あとまっ少しだし・・・」

またまた無言。だけど彼は少しでもだけフィーの事を知りたいと思うようになっていた。この気持ちは何なのか今はまだ分からない。

「・・・僕も一緒に行ってもいいか？」

第三者の声がかかったのは少ししてから事だった。

「構わないさ。フィーも良いか？」

「ん・・・」

「ありがとう。僕の名前はマキアス、マキアス・レーグニッツだ。よろしく」

「うむ・・・」「ん、よろしく」

三人で出口まで歩くことにしたがやはり貴族か平民かのどちらであるかは気になる様子。

「なあ、君たちはどちらなんだ？その…貴族か平民か。どちらでもいい・・・良くはないか。最初に聞いておいたほうがいいと思っ
な・・・」

「私は平民よ。アマデウスは？」

「どちらか・・・と言われれば貴族に相当するだろう。いや、首をか
しげたくなるのは無理のないことだろう。私にも事情と言うのが存
在していてね。跡取りとして不安なのだよ。貴族と言ってもなるべく
普通にしてもらえるとありがたい」

その言葉に『ふむ・・・』や『むう・・・』と何やら考える様子の二人。

「分かった。なるべく普通に接する事を努力してみるよ。だが君は他の貴族のように勿体ぶったり、偉そうには振る舞う事はしないんだな。それも他と違うと言うか・・・。本当に貴族か？」

「そう疑問に思うのは無理のない事だろう。だが私の両親には確かに貴族としての血が流れているし、迷いはあるとしても私も誇りをもって行動したいと思っている。両親が築いてきた事を自分の成果とする事無く零から歩む事を誓っている」

「そうか分かった。君の事情は一通り理解したつもりさ。なるべく普通に接することができるよう僕も努力する」

アマデウスが自分の拳をギュッと握りしめそう断言した。マキアスも貴族にも色々あると感じ取ってくれると嬉しいのだが。それからは少し固い雰囲気ではなくまったりとした雰囲気の中、進むことができている。フィーが表情を強張らせて立ち止まるまでは・・・。

「どうかしたか？・・・っ、何かが激しく衝突する音が聞こえるな!!」

「あなたも気づいた？ん、激しい戦闘の音・・・」

「それが本当なら助けに行かないと!!」

三人はそれぞれの得物を手にして、音がしている方に向かって駆け出した。そこにはすでに他のメンバーが集まっており、魔獣とは思えないどこから見ても石像がそのまま動き出したかのような相手と戦っていた。

「まったく・・・」

「私とマキアスはここから支援する。フィーは場を掻き乱してくれるかい？」

「ん」

「任せてもらおう」

アマデウスはパチンと指を鳴らす。すると無詠唱の雷属性のアーツが飛び出し石像に向かって着弾した。そのアーツの効果は鈍重だ。

「動きを鈍くしました。フィー、頼みます!!」

「・・・んっ」

そこからの動きはまるで訓練され尽くした軍人が強大な敵に恐れもなく向かい、そして打倒したかのような動きだった。10人全員の体が光に包まれ、そして皆の思考が手に取るように分かる・・・そんな雰囲気だった。ともかく、戦闘は終わった。

「それにしても最後のアレは・・・」

「そういえば何かに包まれたような・・・」

エリオットとアリサが呟く。

「皆の動きが手に取るように視えたような気がしたが・・・」

「多分、気のせいじゃないのかも」

「ああ、もしかしたらさっきのような力が」

「そうそれがARCCUSの真価ってワケ!!」

ラウラ、フィー、リンの順に言葉をつなげ、そしてその場にはいはずの女性の声がした。その声の方向を向くとサラ教官が外に通じる通路の中間ぐらい、階段を降りてきているところだった。

「これにて入学式の特別オリエンテーリングは全て終了なわけなんだけど・・・」

とそこので一旦区切ってからこちら側10人を見渡して。

「もっと喜んでもいいんじゃないのー」

と、不満げに声を出した。

「喜べるわけがないでしょう!!」

「単刀直入に問いましたよ。特科クラスは何を目的にしているのだから?」

マキアスが不満をぶつけ、ユースが特科クラスを作った目的を教官に問う。

「ぶむ、そうね。理由は色々あるんだけど、一番の理由はそのARCCUSにあるわ」

そう言われ皆は懐にしまっていた戦術オーブメントを取り出す。

「エプスタインとラインフォルトが共同開発した最新鋭の戦術オーブメント・・・この目で見ることができるとは・・・。そしてアーツや通信のほかにさきほど経験したリンク機能を持ち合わせている。いやはやここまでの代物とは予想以上だったな」

「えっ？あなたは一体何者なのかしら・・・？」

アマデウスが小声で呟いていたのは隣にいたアリサにしか聞こえなかったのだろう。目を見開いてこちらを見てきていた。そして皆に聞こえるように言っているサラ教官も同じようなことを言っていた。

「さっきみんながそれぞれ繋がっていたような感覚・・・」

「戦場ではその効果は絶大よ。お互いの行動を把握でき、最大限の連携できるいわば精鋭部隊と言えるわね。そんな部隊が存在すればあらゆる作戦を効果的に行なうことができる。これまでの常識を覆す“革命”と言えるわ」

「理想的かも・・・」

教官にフィーが同意する。

「だけど、このARCSには適性があってね。新入生の中で特に高い適性を示したのが君たちだった。それが身分や出身に関わらず選ばれた理由でもある。だからやる気のない人までこちらで面倒見切れないの。特科クラスに参加しなくても貴族だったら組と組、平民だったら組までに振り分けられるわ。それにカリキュラムも高度な授業になってくる。それを覚悟した上で特科クラスに参加するかどうかが聞かせてもらいましょっか？」

と言って皆に決定するだけの時間を与えた。だがアマデウスの答

えは既に決まっていた。

「アマデウス・レンハイム。参加します」

一歩前に出てサラ教官に告げる。他のメンバーは驚きを隠せない様子だ。

「おや、一番手はあなたね？理由を聞いてもいいかしら？」

「そうですね……。自分の名に意味を持たせるためです。家族には渋々ここに入ることを認めてくれたので恩義を感じています」

「そう……。その言葉には更に深い意味がありそうですね。いつか聞かせてもらえるかしら」

「ええ、決意が固まったらいつでも……」

少し微笑みを浮かべて言う。

「さて、ほかの人たちはどう？」

その声を聞いてアリスとエリオットの間にはいた黒髪の男子が一歩前に出た。

「リイン・シュバルツァー。参加します」

「え……」

「リ、リイン？」

アリスとエリオットが驚きの声を上げる。

「次は君か。何か事情があるみたいね？」

リインは首を横に振って否定する。

「いえ、我侂を言って行かせてもらった学院です。自分を高めるのであればどんなクラスでも構わないと思ってます」

「ふむふむ」

そしてまた少しの間静寂が戻りまた一人、そして一人と参加を決めていき全員が特科クラスへの参加を決めた。

「これで10名 全員参加ってことね。この場をもって特科クラス【組】の発足を宣言する。この一年、ビシバシしごいてあげるから楽しみにしていなさい！」

そう言うサラ教官の言葉の端々には喜びがにじみ出ていた。やはり新しい取り組みゆえに参加を断る生徒がいても思っていたのかもしれない。

そして彼らを見守る二人の男性の姿が特科クラスの上の方、入口の付近にいた。

彼らには二人の声など聞こえないが、穏やかな雰囲気では話しているのだろう。

「ひょっとしたら彼らが、光」となるかもしれませんが。動乱の足音が聞こえる帝国において対立を乗り越えられる唯一の光に」

「ふむ、その中には、彼も含まれているのでしょうか？」

「ハハ、否定はしませんよ。おっと弟がこちらに気づいたか。さて私はそろそろここを去ることにします。どうかよろしくお願いします」

下方に目をやると少しくすんだ色の金髪をした青年が、こちらを見て周りに気づかれないように小さく手を振っているのが見えた。それに頷き返してそこを立ち去っていった。

「弟はこの学院で心身共に成長して自分に意味を持ってくれればいいのだが・・・」

寮にて

「ふう、やっと部屋を片付けることができたな」

オリエンテーリング後、サラ教官に連れられてやってきた建物はこれから生活する寮だった。学院からは少し離れているものの、近くには木々が涼しげに揺れる公園などもあり生活するには何の問題もなさそうだった。

「さてと……。一階は食堂とちょっとしたロビー、二階は男子、三階は女子が使って。あつ、ちなみに私も三階にいるからなんかあつたら遠慮なく来てちょうだい。細かいことは言わないけど節度ある行動を取るように……。あとは聞きたいことある？」

特科クラス10人に口頭で説明しつつ質問があるかどうか聞いてきた。

「サラ教官、一つよろしいでしょうか？」

「アマデウス君、なにに？」

「私のこと聞いているでしょうか？」

「ええ、勿論よ。学院長から聞いているわ。実家からの呼び出しがあった場合、即座に行動できるように一階の食堂正面にある部屋を使つてことね。鼻屑と思いがちだけどほら見て」

ガチャッと音を立ててアマデウスが使うことになるであろう部屋を見せる。

「ちょっとだけ古いでしょ？アマデウス君に配慮を示す代わりに古めの部屋を用意したってわけ。他のみんなの部屋はこれよりきれいよ」

『どじっ』と皆に同意を求めているようだが、他の皆からは反対意見が出ることはなかった。これで晴れてアマデウスの部屋が先に決まった。一階食堂正面に位置する少し大きめだが、他の皆の部屋と比べて古い作りになっている部屋だった。

それから数十分の間、彼は四苦八苦しながら持ってきた家具を配置してようやく一息つくことができた。

「ふう、やっと部屋の中を片付けることができた。・・・それにしても特科クラスとは名ばかりで一人一人の個性が強いクラスになりそうだ。・・・これからクラスメイトになるのだから挨拶に行ったほうがいいのでは・・・」

整頓されたベッドに座って落ち着いていたが、自分なりの結論を出して自室から出るのであった。まず最初に教官の部屋を訪れて許可をもらいにいくことにした。やましい事は無いにしても女性の部屋も訪れるつもりだったからだ。

「ンンン」

「はぁい」。誰？」

「サラ教官、アマデウスです。少しお時間よろしいでしょうか？」

「んんんん」

「失礼します。おっと、飲まれていたところでしたか。急に押しかけてしまい申し訳ありません」

「いいよ。実を言うと私もあなたにちょっとばかり聞きたいことがあってね……」

『どうぞ』の返事の後にサラ教官の部屋に入ると、お酒のボトルを手にして飲んでいたところだった。それにしても聞きたいことと何のことだろうかと思いつつもお邪魔した。

「んくっんくっ……!!ぶっはあ〜。いやあ、この仕事もなかなか疲れるわね……。で、アマデウス君の用事はなにかしら?」

「ええ、そんなに難しいことではないのですが……これからクラスメイトになる人たちへの声掛けをしておきたいなど。それで二階は何の問題もないのですが、三階は……」

「なるほどね〜。アマデウス君は紳士なワケか……。ふふっ」

含み笑いをしていたがアマデウスにはなんのことだかさっぱり分からなかった。

「ああ、エッチな事しないかぎり大丈夫よ。一人を除いてあなたと同じ年だし、戦闘能力だってあるわけだから……それでも悲鳴上げられたら私でも擁護できないわよ?」

「おっしゃっている意味が理解しがたいのですが、何か言われたら教官の許可をもらっているというふうでよろしいのですね?」

「ええ」

そしてまた一口より少し多めにボトルを煽る。

「それでサラ教官は私に何を聞きたいのでしょうか？オリエンテリングの時、私が自己紹介した時に突拍子もない声を上げたことと何か関係があるのでしょうか？」

彼がフィーと一緒に落ちていかなかった時に自己紹介をしたのだが『えっ』と目を丸くして驚いていたのが記憶にあったのだ。

「まあそうね。あなたのプロフィールを見ても詳しいことは何も載せられていない。ヴァンダイク学院長にそれとなく聞いてみるはぐらかされる一方。私もそれなりの修羅場をくぐって来たりもしている。『レンハイム』と言う名前に少々懐かしさを感じたりもしていた」

「……………」

今までのおちゃらけた表情を無くして、真剣な表情を見せているのでこちらもそれなりの態度を見せた。

「はつきり言っわ。リベール異変の時に地元の遊撃士と共に行動していた、演奏家オリビエ・レンハイムと何か関係がある？」

「はい、ありますが……………」

何か問題か？とでも言わんばかりに素で返した。

「へっ？だ、だって彼は……………」

「オリビエ・レンハイムの正体はエレボニア帝国の皇子、オリヴァルト・ライゼ・アルノールですから私とは何の関係もない？しかし考

えてみてください。何かの事情で皇位継承者から隠され続けた存在がいて、その存在がレンハイムの名を使っていたとは」

「……………（パクパク）」

「彼が使っていた場所はリベールだったので、帝国方面ではまだ見知らぬ名前だと思って使っていたのですが、修羅場をくぐってきた教官に初日にはれるとは思いませんでしたよ（ハハハ）」

こちらを指差している指が虚空でプルプルと震えていた。その行為も失礼に当たると思ったのか指をすぐに下ろして俯く。

「……………の……………は……………と……………しゃるの……………か？」

「なんででしょうか？」

聞こえなかったので聞き返した。するとキツと真面目な顔をして正面から向き声を出した。

「本当の名前は何とおっしゃるのでしょうか？」

「敬語じゃなくてもいいですよ。ええっとアマデウス・ライゼ・アルノール皇位継承第一位です。この事は私の命を狙う人が余りにも多かったので父上と母上と相談して隠したというわけです。なので知っている人は少ないですよ。ここまで明らかになるのが早かったのは予想していませんでしたが……………」

「……………」

ガクツと力が抜けたようにベットに腰をかけたサラ教官。

「ほかにこの事を知っている人たちは？」

「ヴァンダイク学院長とオリビエ兄さん、それに私の近衛騎士ぐら
いですね。護衛の関係でクレアも知っていたかな？」

「っ!!」

クレアの名前を出した時に教官の肩がピクリと反応したが、それ
については問い尋ねることなくそのまま流した。

クレア・リーヴェルト。鉄道憲兵隊所属しどんな状況でも冷静に対
処でき、優れた先読み能力と用兵術を持つことから、氷の乙女アイス・メイデンの異名
を持っていた。

「この学校にいる間は普通の学生をやっていきたいと思っているの
で、一学生として当たっていただけると嬉しいです」

「分かり・・・わかったわ。難しいかもしれないけど頑張るわ。あと
は他の部屋を訪ねて顔出しすると言っていたわね。貴族の子とかい
るけれども大丈夫なの？」

「ええ、表舞台にはあまり出ていなかったので大丈夫だと思います。
それでもそれなりの警戒は必要ですが・・・。それではサラ教官、明
日からよろしくお願いします」

「勿論よ。皆が楽しくそれでいて一人前になれるように教官努める
わ」

『失礼しました』と伝えて教官の部屋を後にした。それでもアマデ
ウスとしては神妙な面持ちになった。兄さんオリビエの名前を知っている人

がこちらにもいたことである。

リベールならそれなりに知られている名前ではあるらしい。カシウス・ブライトの子供である正遊撃士エステル・ブライトと養子のヨシユア・ブライトと一緒に、リベール異変を回避した民間協力者の中に演奏家オリビエ・レンハイムがいたのだから……。

だが今の段階では情報が少なすぎて、何を考えたら結論が出てくるのかすら分からなかったので一旦保留しておくことにした。今宵はクラスメイトになる彼ら彼女らと一言二言でも会話したい、そんな気分だった。

コンコン

「はい、どなた？」

「アマデウス・レンハイムだ。サラ教官の許可を得て、これからクラスメイトになるので会話したいと思って訪れたわけだが、数分話しても大丈夫か？」

「ちょ、ちょっと待って……」

中から慌てた音を伴いながら部屋の扉を半分より狭く開けてくれたのは、アリサ・Rだ。

「慌てなくても良かったのに……」

「本当に教官の許可をもらったの？」

「ああ、ここに来る前に教官の部屋に行って許可貰ったよ」

「そっか……。オリエンテーリングの時に聞いていたと思うけどアリサ・Rよ。よろしく」

つつけどんながらも部屋の扉を開け、返事をしてくれるだけありがたいと思うべきだろう。それにしても彼女が“R”と名前を隠しているが本当の名前を知っていたりもしていた。アリサの母親と数回会って話をしていたのが原因だった。

「最初に一つだけ言っておくと“R”なんだが……。私は知っていたりする。ああ、これにはワケがあって君の母上と何度か会ったことがあってね……。その時にアリサの話を聞いていたりもしていたのだよ。Rのところには　　だな。だがアリサが意図的に隠しているということは理由があったのこともだと思っから、君自身の口から聞くまで私も知らないふりをしておこう」

「あ、ありがとう。あなたって不思議な雰囲気を持っているわね？ 貴族と言っていたのに妙に偉ぶっていないと言っか……。普通に見えるわ」

「アリサからもそう言われるとは……。オリエンテーリングの時に一緒になったマキアスからもそう指摘されたよ。彼は貴族嫌いだけれども私には少し打ち解けている様子だった。それは私の目的を告げたからだろう」

「そ、そっか……。ふふふ、これからよろしくね」

「ええ、そうですね。よろしくお願いします。……では失礼します」

『ガチャ』と言っ音を立ててアリサの部屋の扉が閉まる。次に扉を叩いたのはアリサの正面の部屋だった。ノックをしても部屋の中から音がしなかったので、もう寝たものだと思い立ち去ろうとしたとこ

る眠そつな声が聞こえてきた。

「ふわあゝ誰？」

「起こしてしまったようだ。申し訳ない、アマデウス・レンハイムだ。これから同じクラスで学ぶのだから挨拶をしておこうと思っ
いてね」

「……ちよつと待ってて」

すぐに扉が開かれた。出てきたのはフィーだった。

「フィーとはオリエンテーリングの時にも一緒だったけれども改め
て挨拶しておこうと思っていたんだ。……寝ていたとは予想できな
かったよ。申し訳ない」

「別にいい……。気配はしていたから……」

「そうか……。君は不思議な子だ。サラ教官とは前からの知り合い
だったのか？穴に落ちる前にサラ教官と話をしていたようだった
が……？」

「そう、昔からの知り合い。……用はない？」

「ああ、それじゃあね」

言うことは無しと言わんばかりに扉が少し強く閉じられた。眠
かったのかもしれない、サラ教官との昔を勘繰られるのが嫌이었다の
かもしれない。どちらにせよ少しプライベートな部分に立ち入りす
ぎたのだろう。

次に訪れたのはフィーの隣の部屋だった。確かここはエマと言う主席で入った子が使っている部屋だった。

「はいどちらさまですか？」

清楚な声が聞こえてきた。

「アマデウス・レンハイムと言います。挨拶まわりに伺いました、少しお時間よろしいですか？」

「ええっと……。少しなら構いませんよ。少しお待ちください」

数秒後、彼女が現れた。普段着に着替えながらも、どこにも隙を見せることなくキッチンとしていた姿に一瞬見惚れる。見惚れると言っても病的なものではなく男性なら美人を見てドキッとするぐらいの感覚だ。

「はい、どうなさいましたか？」

「これから共に学び合う仲間になるかもしれないので、その挨拶に来たのですが……。エマさんはとてもキレイですね」

思ったことを口に出してから少し後悔した。と言つのはみるみるうちにエマの顔が真っ赤になったからだった。

「えっと、どうかしましたか？」

「そ、そんなこと言う人初めてだったので驚いてしまって。それでもぶふっ、悪い感じはしませんね？アマデウスさんはさうとそんなことを口走ってしまつべらい感情が豊かなのですか？」

「ふむ、思ったことを口にするこゝとで軋轢を生じさせてきたこともありましたが、それでも陰口よりは印象よくなる場合が多かったものですから……。エマが悪感情を持っていないだけありがたいと思っべきでしょうか。これからはもっと言っべき事と言わない方が良い場合を勉強しなければなりませんね……」

「アマデウスさんは真面目ですね。それよりも肩の力を抜いて生活したほうがもっと楽しめるのではないのでしょうか？」

エマが話しやすい雰囲気を持っているせいか、普段言わないようなくさいセリフを吐いてしまっていたので内心は心臓がバクバクと音を立てていた。

「さすがは主席でこの学院に入っただけはありますね。考え方一つを取ってもこちらが学ぶべき事柄が沢山あるようですね……」

「そんなことないですよ」

謙遜なところも嫌味や作られたものでないところも高評価できるところだろう。

「っと、夜遅くまで女性の部屋を訪れるもの宜しくないと思うのでこれで失礼するよ。明日からよろしく願います」

「ええ、よろしく願いますね」

そう言ってから部屋をあとにした。これで三階はあと一部屋だけとなった。その扉に近づいてから分かったことだが、妙な熱さを感じた。これは闘気の種類だろう。部屋の持ち主が得物を振るっているのかもしれない。

コンコン

「……………」

部屋からは何の返事も返ってこなかった。一言だけ挨拶を交わしたかったのでちょっとだけ自身の気配を大きくする。と言ってもやることは殺気を相手にぶつけるだけ。それも三階で、ではなく一階に戻ってから殺気をぶつけた。数秒後慌てた様子で扉を開ける音が聞こえてきたが、二階部分には誰もおらず感じたことのない種類の殺気のように不思議そうな雰囲気か漂ってきた。

「フフッ」

自室に戻ってからいたずらが成功した悪ガキみたいな笑みを浮かべた。一階にいる彼が二階を通り越して三階にいる相手にだけ殺気をぶつけることができたのは、とある彼女との出会いから学んだことが深く関係していた。

「今の私だったら彼女……には程遠いかもかもしれませんが、彼女に仕えていた三人には届くでしょうか？あれから会っていませんものね……。さて兄に手紙でも書きましようか」

机に向かってから便箋を取り出し今日あった事の中で優先順位が高そうなことだけを綴る。最後の文面の締めくくりは「了」だ。

『サラ教官にバレました。"レンハイム"という名前はリベールでは有名だったようです。特に遊撃士の中では。ではサラ教官は遊撃士を勤めていたのでしょうか？私は兄さんの口からは聞かないつもりなので心に秘めておいて下さるとありがたいです』

「……………」これだよ。アルとリックにはしばらくしたら会えるで

しょうし、この機会に少し兄離れをしてくれるといいのですが……」

アマデウスはこのように考えてオリヴァルトにだけ手紙を書いたが、後日アルフィンとセドリックには手紙が届いていないことで二人共ぐずるのだがそれはまたの機会に……。

学院生活4月17日

あれからいくらかの日々が過ぎ去った。慌ただしく特科クラスが発足したものの、それなりに皆と打ち解けることも出来たことはアマデウスにとってプラスになることだろう。彼はいつものように学院に行く準備をしていた。

オリエンテーリングの時に、ラッキースケベな事をしでかしたりインとその被害者のアリサとの仲はこじれたままの状態。いや、何とかしてアリサは謝ろうとしているがそれでも口を開いたらそれとは逆の事を言ってしまう次第。何かのきっかけがあれば二人は変わるのだろうか……。

それよりも深刻な問題を抱えている二人が存在していた。10人しかない組の中がギスギスしている渦中にあるのは四大名門のユース・アルバレアと平民マキアス・レーグニッツだ。マキアスは大の貴族嫌い、ユースはそれに引っ掛かりを感じながらも平民とは相容れないと言つ言動を繰り返していた。

「早くどうにかしてもらいたいものだ。……おっと、そろそろ行く時間が迫ってきたようだ。それじゃあ行ってくるよ」

机に置かれている教材や家から持ってきた本の中に、隠すように置いた家族写真に声をかける。見つかったら大騒ぎ以上のことが起きることは免れることがない事実だろう。

「二人共おはよう」

「おはようございます」

「お、おはよう。どうせだったら一緒に行かない？ 私先に出て待つてるね」

ロビーに出てすぐ出会ったのはクラスメイトのリン、エリオット、エマ、アリサだった。リンは何とかして謝ろうとしていたようだったが、アリサに糸口を切られそこに自分アマデウスが登場したようだ。

「うむ、それはいいのだがお取り込み中だったか？」

「いや、気にしないでくれ」

「あははは・・・」

リンとエリオットのほうを向いて聞いてみるが、リンの返事はちょっとガツカリ感が漂うものでエリオットはどうしようもないと言わんばかりの笑いだった。

「そうか。リン、いつかきつとアリサと話すことができるんじゃないか。アリサだって口を開こうとして口を開いたら、別のことを口走っていることを後悔しているような雰囲気だぞ」

「そう言ってもらえるとありがたい。アマデウスは先に行ったらどうだ？ エマとアリサが待っているんじゃないか」

「そうだな。ではまた学院で」

他力本願で問題を解決したところで、当人の問題がそのまま残ってしまえばそれは本末転倒な結果になることは目に見えている。どうにかならないものかなあと思いながら、先に行ってしまった二人を追って寮の扉を開けた。

「待ってくれていたのか、ありがとう」

「ぶふっ」

「べ、別に待ってなんかいないわよ」

エマは笑みを浮かべてこちらを見、アリサはリインと仲直りできなかったことに不満を抱いていながらもそれを隠そうとしているらしい。・・・隠しきれないことは一目瞭然なのだが。

「それにしても両手に花とはこの事なのかな？」

「」
「??」

二人は最初気づかなかったようだ。そしてしばらくしてからその言葉の意味を知り、あわあわとして顔を真っ赤に染めた。

「も、もうアマデウスさんはご冗談がお好きなんですわー」

「あなたが言うとお気にしか聞こえないからやめたほうがいいわよ」

エマは純真に頬を染め、アリサにはジト目でこちらを睨んできた。

「やや本気だったのだが、ね。微笑ましくも妹のような感じがしてだな。仲直りしたいのにやきもきして右往左往したり、今しか得ることのできない青春じゃないか!!」

「あははは・・・」

「やっぱりアマデウスは変だわ。誰かに汚染されているんじゃない

のー？」

「むう……。兄さんの影響かな」

「あら、兄さんがいるの、どんな人？そう言えば妹のような感じって言うってたから妹さんもいるの？」

「兄と妹と弟が一人ずついる。兄は演奏家だが少し茶目っ気のある兄さんだ。妹と弟は双子だがどちらも私にべったりくっついていて離れようとしめない。今回の学院への入学の時にも大変な思いをして入学することができた。だが兄弟仲は順調だ」

「へえ……。あたしは一人っ子だから羨ましいなあ」

「ええ、私もです。兄弟がいるってどんな感じなのでしょう」

アリスとエマは一人っ子らしく想像を膨らませていた。寮から学院まで他愛もない話をして 組まで来た。

「おはよう」

「おはようございます」「おはよー」

ドアを開けて既に来ているクラスメイトに声をかけていく。まだ来ていないのは寮で会ったリインとエリオットだけだった。ふくれっ面をしているユースとマキアス、黙想をしているのか目をつぶった状態のラウラとガイウス、眠そうな顔をしているフィーがいた。皆がそれぞれ返事を返してくれていた。

しばらくしてからエリオットとリインも浮かない顔をして入ってきた。どうやら学院前ではったり貴族の生徒と出会ったらしく嫌味

をグチグチ言われたようだ。気にしていないとはいいつつも、この特科クラスは今までの常識を覆し、貴族と平民が入り混じったクラスゆえに良くも悪くも目立つからだろう。

そしてサラ教官によるホームルームH R 後、1限目の授業が始まった。授業内容は割愛することにするが、当てられたリインが言いよどむ中隣の席に座っているアリサが何とか会話のきっかけをつくらうとしてノートの隅に答えを書くも、リインはそれに気づくことなく考えた未正解の言葉を発言する。座る際にアリサが助け舟を出していることに気づくも、またアリサはプイッと横を向く。

「まったくいつまで意地の張り合いをしているんだが……。きっかけがあれば何とかなるのは分かっているんだけど。そのきっかけが欲しいな」

「アマデウス君、聞いていますか？ここは後々ためになりますよー」

「ええ、大丈夫です。すみません、少し心ここにあらずになっていたようです」

半分ぐらいはアリサとリインの事を考えていた。彼も人知れずお人好しな部類になるのかもしれない。その後は注意されることもなく無事終えることができた。

放課後、アマデウスは一つだけやりたいことがあったためすぐに教室を出ようとしていたサラ教官を呼び止めた。

「サラ教官、少しよろしいでしょうか？」

「ええ、いいわよ。何か聞きたいことでもあった？」

「はい、入学式の始まる前でしたが得物をあずけた時にいた小柄な生徒はもしかして……」

「生徒会長よ。トワ・ハーシエルって言うわ。もしかして惚の字かなあ〜?」

「今はそのような感情を持ち合わせておりませんが」

そう言つとサラ教官は慌てた様子を見せた。

「ちょ、ちょっと待って。今は『ってどついつ事?』」

「人の感情はどのように動いていくかわかりません。少し前まで喧嘩していた二人が仲良く友情を育むなんてことはありえる話ではありませんか?そのような意味で『今は』と強調したまです。それで生徒会長にお会いしたので何処に行けばよろしいでしょうか?」

「アハハハ……。ごめんなさい、変な勘ぐりをしてしまったわ。それでトワ会長の居場所ね。今の時間だと学生会館二階の生徒会室で仕事をしているはずだわ」

「感謝します」

お辞儀をしてからサラ教官と別れて学生会館を目指す。新入生らも新たな生活を始めクラブ活動などに精を出すようになっていらい。エマは文学系のクラブに、アリサとラウラは体を動かすクラブを探すなどと言っているのを聞いていた。

「よっ、後輩君。元気にしてる?」

「私ですか?ええ、あなたが先輩なら私は後輩ということになるで

しょうか」

「かーっ、堅いなあ。もっと、こう・・・肩の力を抜いたらどうよ。楽しい学園生活は始まったばかりだろ？」

後ろから声をかけられたので振り向くといかにも不真面目そうな青年が声をかけてきていた。

「これが悪くも良くも私と言う個人なので・・・無理ですね」

「・・・おおっ。そうか、まあてきとーに頑張れや。後輩君？」

「ええ、ありがとうございます。先輩」

話す相手が男性だと少しないがしろになる傾向があるのだろうか、話していても何も思うところがなかった。それよりも・・・。

「いや、考えないようにしよう。ここが学生会館と言うところになるのか。一階が食堂と購買、二階に文学系のクラブと生徒会室がある、と。三階は・・・知っても行く機会はないだろ」

三階は貴族だけの部屋があるらしいが、わざわざそのような場所に赴く必要性を一切感じるものがなかったので頭の中で考えるのをやめた。

「ふう・・・」

脳裏に思い出すのは入学式の前に出会った生徒会長と思わしき女性と、つなぎを着たいかにも技術家な男性。いやアマデウスは小柄な女性しか考えていなかったのかもしれない。事故とはいえお姫様抱っこのような形式を取ってしまった時、電撃が走ったような感情に

襲われたのだ。

「このまま不審な行動を取っていても時間だけ過ぎてしまいうだけ……よし!!」

「コンコン」

『はいはい。開いているからどうぞっ!!』

「失礼します」

中から初めて聞いた時と同じような朗らかな声が聞こえてきたので、声をかけつつ扉を開いて中に入った。

「ふえっ!?!……………(パクパク)」

窓に近いところに机が置かれており、椅子に座ったままで返事をしたものと思われる部屋の主はこちらを見た瞬間に変な声を出していた。そしてそのまま声にならないアワアワしていた。その様子が小動物ちつくで微笑ましかったが、ここに来た理由をすぐに伝えねばなるまいと思い佇まいを直して声を出した。

「サラ教官に聞いてここに来ました。理由は入学式の前にお手を煩わせてしまったからです。あの時大変な思いをして運んでもらったケースですが、オリエンテーリングの時には使うことがなかったので。地下まで運ぶのは大変だったのではないでしょうか?」

「……………」

「生徒会長、どっかされましたか?」

黙ったまま固まり続けているので机に近づいて生徒会長(?)をじっくり眺める。するとすぐに顔を赤らめて再起動する。

「ごっ、ごめんね。挙動不審な言動をしてっ。アマデウス・レンハイム君だったね。私の名前はサラ教官から聞いているかもしれないけれどもトワ・ハーシエルって言います。よろしくね・・・」

「はい、よろしくお願ひします」

「……………」

会話が終了した。だがこのままではらちがあかないと思ったトワが聞く。

「そ、それでここに来た理由はその謝罪っていうだけじゃなさそうだけれども……………」

「ええ、会長は多忙と聞いておりますので何かの手伝いが出来れば…………と思い足を運んだ次第です。それに私も書類整理などの経験を積みたいと思っておりますので…………」

「な、なるほど…………。多忙っていうのはこの机の上を見ればわかると思うけれどもそうなのよ。入学式が終わったらやること山積みで…………。ホントにいいの?アマデウス君は新生だから今のうちに楽しんでもらいたいというのが本音になるのかな。でもでも手伝ってもらったら助かるのは助かるのよーっ!!」

葛藤がトワ会長の中に存在するようなので、こちらの考えを伝えておく。

「トワ会長が気に病むことはないんですよ。先程も言いましたが、

私のスキルアップにも繋がりなおかつトワ会長は山積みな問題が軽減される……。一石二鳥じゃないですか？」

「うーん、そうね。お願いするわ。それでも重要度が高いのは私がやるとしてアマデウス君は承認するだけの書類に印いんを押してくれるかしら？」

「ええ、分かりました」

しばらくの間、時々『うーんうーん』と唸りながら書類整理をするトワ会長と、軽快に印を押す音だけが生徒会室に響いていた。そして二人だけの空間が気にならなくなってきた頃もう一人の来訪者が現れた。

コンコンッ

「はいはい、開いているからどうぞーっ」

『失礼します』

入ってきたのは特科クラスのラッキースケベな青年リンだった。

「アマデウス……。君もいたのか？」

「ああ、ちょっとした手伝いを、だな。ところでリンはトワ会長に何か用でもあったんじゃないのか？」

「サラ教官に頼まれてね。僕たち特科クラスの学生手帳を貰いに来たんだ。やることもなかったしね」

サラ教官に頼まれた時の事を思い出しているのか、苦笑気味な答え

だった。

「ああ、あの件ねー。ええっと・・・あったあった。これが君たち特科クラスの学生手帳だよ。他の生徒に比べて色々と変更があったりして今まで渡せてなかったんだ。リイン君とアマデウス君の分は先に渡しておくね？」

「感謝します」

「ありがとうございます」

トワ会長に対してアマデウスとリインが感謝を述べる。この後、トワ会長がリインに生徒会では手を回しきれない仕事を行なうとか何とか話し合っていたが、アマデウスにとってあまり関係のないことと決めつけてそのまま書類に印を押し続けていた。

「・・・では失礼します。アマデウスもおつかれさん」

「うむ・・・書類から目を離せないのでもこのままで失礼。リインも明日頑張ってな。私の手が空いていて力になれることがあれば言ってくれ」

「ああ・・・」

『バタン』と言う音と共に生徒会室に静寂が戻る。そしてそのまま書類だけに目をやっているところ無かったところに影ができたのでふと目を上げるとそこにはトワ会長がこちらを眺めていた。

「会長・・・。どうかされましたか？」

「ううん、エヘヘ。仕事に没頭している姿も良いというか・・・じゃ

なくって!!ほ、ほら外を見て。もう夕方というより夜に近づいてきているから終わろうかと思って。あとは私がやっていくから。アマデオス君は帰ったら?」

「……私が帰ってからトワ会長は何をなさるんですか?」

「私は……残った仕事をやってから寮に帰ろうかと思っているよ。ああでもそんなに提出する期日が迫っている訳じゃないからそんなに急がなくてもいいんだけど。それでも先に終わらせておけばいいかなーって……」

にこやかな表情をこちらに向けながらまだ仕事が残っていることを告げる。だが、その仕事の重要度は低いらしい。……となるとこちらの取る手は一つだけ。

「トワ会長、今日は止めましょう。会長も疲れている様子……それほど重要な書類でないなら帰って休まれた方がいいですよ」

「でっ、でもー」

「ト・ワ・会・長。帰りにデザート買って一緒に食べましょうか?」

「わっ、いいの?……じゃなくてっ!!」

一瞬喜びを隠せなかったが完全に丸め込まれる前に正気に戻ったようだった。しかし甘いものの誘惑には勝つことなく一緒に軽食を取ってから、トワ会長が住む寮に送り届けてから自分の住む寮へ帰った。寮ではリインがそれぞれのクラスメイトに学生手帳を渡している途中らしく、階上からリインの声が漏れて聞こえてきていた。

「またリインはアリサに謝れなかったのかな。アリサの戸惑う気配

がする。やれやれ本当にいつになったら彼らは仲直りをする事ができるのやら……」

「おや、ARCUSが鳴っていますね。誰からでしょうか。はいもしも……」

『兄様……』

「ああ、愛^{いと}しのアルじゃないですか。どうかしましたか？」

『うん、一つだけお願いがあって。それと声が聞きたかったものですから……』

「そうですね、嬉しいですね。女学院ではちゃんと勉強していますか？」

『はい、淑女として成長過程にあります但しなんの問題もなく過ごすことが出来ています』

「そう……、良かったね。それでお願い事は？」

『確か明日はアマデウス兄様の休みの日でしたわね。何か用事が入っていたりしますか？』

そう言われてクラスメイトや他の人との会話の内容を思い出す。

「現段階では用事を入れてないよ。アル、来て欲しいのか？」

『っ、そうなの!!エリゼって言う私の無二の親友が会いたって言うんですから……。それと私自身も会いたいと思っております』

「そうですね、良いですよ。ほかならぬ妹の頼みですからね。無理難題でない限り答えるつもりですよ」

『そうですね。良かったです』

限りなくゼロに近いが、断られるかもしれないでも思っていたのだろう。ホッとした雰囲気の声が聞こえてきた。

「明日のいつ頃待ち合わせるかい？」

『明日は日曜日ですから昼近くに女学院の門のところで待ち合わせするのはどうでしょう？』

「分かりました。では明日女学院で・・・」

『はい、お休みなさい兄様・・・』

名残惜しそうな声がARCUSから聞こえてきて切れた。

「明日は久しぶりの帝都か。サラ教官に外出許可証を貰いに行つてこようか」

その後、お酒が入っていたサラ教官を見つけ許可証を貰ったが酔いすぎているのか、それともよっているふりをしているのか分からない教官だった。

閑話：妹たち

「はぁ……………」

「姫様……………」

「……………」

「二三日前からからずっとこの調子だった。授業中はともかく休み時間になると上の空になって、何かを考え続けていた。私にはそれが何のことなのか分からない。聞いてもはぐらかされるだけだった。今日こそは聞き出したいと思っております。」

「…………えっ、私ですか？ああ自己紹介がまだでしたね。ここは聖アストライア女学院で、私はここに通うエリゼと申します。エリゼ・シュバルツァーと言ったほうがわかる人がいるかもしれませんね。そう、トールズ士官学院にいるのは私の兄のリン兄様です。そして私の前でさきほどからずっと上の空なのは姫様こと、アルフィン・ライゼ・アルノールです。」

「もっっ、ひ・め・さ・ま!!」

「きゃっ。エ、エリゼじゃないの。驚かさないでちょうだい。どうかしたかしらっ。」

「私と一緒なのはお嫌ですか？さきほどからずっと上の空でらっしやっ……………」

『お嫌…………』のところで慌てた様子で首を横に激しく振った。

「ううん、そうじゃないの。エリゼ、もう悪かったですわ。・・・時にエリゼは口が堅いかしら？私がなんのことで思い悩んでいるか伝えてもいいのだけれども、それはそれは重大な秘密を打ち明けないといけないの・・・。それでどう？私が今から言うことを時期が来るまで誰にも告げないと言う覚悟はおありかしら？」

「それは・・・誰かに話したらどうなるのでしょうか？」

「監視付きで監禁かしら・・・。」冗談とかではなく・・・。」

「姫様がここ数日の間ずっと思い悩んでいたのは明らかですし、秘密を共有できる相手が一人いるだけでも違うものと思います。ええ、大丈夫ですわ。私は誰にも伝えたりはしません。女神エイトスに誓ってもいいです。」

「その言葉信じるわ」

エリゼの真剣な眼差しに口が堅いと思ったアルフィンは親友に打ち明ける。

「私と弟のセドリックは皇位継承者として第何位か知ってますか？」

「それはセドリック殿下が一位、姫様が二位なんじゃないですか？」

「そうね、表向きはと言う言葉が先に続くけれども。実は私とセドリックは一つずつ順位が下がるの。本当の皇位継承第一位が隠されているの」

「えっ？」

「第一位という事もあって最初は狙われ続けたわ。だから存在自体を隠しておくようにしたの」

「それは分かりましたが、その話と姫様が上の空だというのに何か関係があるのですか？隠され続けているのであれば、命が狙われる心配はないのですし……」

「今、件の兄様は帝都にいないの……」

絞り出した声は狭すぎず広すぎない二人しかいないこの空間に響いた。

「それではどうして……？」

「トールズ士官学院にいるわ」

「はいっ!？」

もっと遠くで気軽に会うことの出来ないような場所にいるものだと思い込んでいたエリゼは、近場過ぎる場所を聞いて気の抜けた返事を返した。

「トールズ士官学院にいるのよ。エリゼだったら行けるけれど私の立場を考えたらいそれと行けるものでもないでしょう？それにちょっとお願いして特科クラスの名簿を見せてもらったら綺麗な子ばかり……。ああ兄様が取られてしまう」

まくし立てるように一息で言ったので呆れた返事がもれてしまった。

「はぁ……」

「エリゼのお兄さんも誰かに取られてしまつかもしれないわね？」

「だ、駄目です!!・・・はっ!?もう姫様・・・」

「ふふふっ、やっと正気に戻ってくれたわね。そうよねえ、エリゼのお兄さんはエリゼの宝物ですものねえ」

エリゼがアルフィン聞き捨てならない言葉で正気になると、そこにはニヤニヤした表情でこちらを覗き込んでいるアルフィンがいた。

「知りません・・・」

「ああ、うそっぞ。ごめんねエリゼ。機嫌を直してちょうだい？」

少し慌てた様子で両手を合わせ軽い感じで謝ってくる。いつもアルフィンがエリゼをからかい、それに対してエリゼが怒ったふりをしてアルフィンが謝る・・・を繰り返しているうちに親友という間柄になりつつあった。

「それで姫様。そのトールズ士官学院に行っただお兄様についてですが、何か目的があってそこ学院に入られたのではないのですか？」

「ベッドで耳を塞いでいたり説明しようとしたりすると逃げたけれども、それでも目的は上に立つ者として力でねじ伏せるのではなく帝都民と同じ目線にあることで見えてくることもある。とか言っていたかしら。とても反対出来るようないい加減なものではなかったわ」

「なるほど・・・。とてもよく考えているのですね。さすが姫様が敬愛するお兄様ですこと。それに比べて私の・・・」

「エリゼどっかしたかしら？」

「いいえ、何でもありません。でも姫様のお兄様見てみたいですよ」
話題がエリゼの兄のことになる前に変えた話題だったが、これがエリゼやアルフィンの将来を変えていくものだとはこの時予想できるものは誰もいなかった。例えこの場に氷の乙女アイス・メイデンがいたとしても……だ。

「では連絡を取ってみましょうか？多分無理難題でない限り応じて下さるでしょうね」

その夜、アルフィンはアマデウスに連絡を取り明日帝都で会うことにした。

「久しぶりに兄様に会える。ふふっ、楽しみですわ。ああでも待ち合わせが女学院の門ですからほかの人に見られて噂になってしまわないかしら……」

その光景が目には浮かぶようだったが、もう少しで自分の兄を世間に公表しようと思っていたので良い方向に転がるとは思っていても悪い方には向かないと想定していた。このような彼女の勘アルフィンはほぼ当たるのだ。

「ええっ、明日兄上と会っんですかっ!!」

昼過ぎにアマデウスが女学院に来ることを知ったセドリックは、文字通りではないにしても血の涙を流さんばかりにアルフィンに迫った。

「ええ、明日兄様も休みとの事。セドリックもあえはよろしいんじゃないありませんか？」

「む、無理だよう。それでなくても女学院に行ったら注目を浴びてしまうでしょ。．．．今回は諦めます。．．．が、次回は抜け駆けしないでくださいねっ!!」

「はいはい、分かりましたよー。それで兄様に伝えることはない？」

「特には．．．。ああツールズ士官学院の様子とか聞きたいですが、それは定期的に送られてくる手紙に書かれていますし家族が揃った時に聞くことにします。それにしてもいいなあー．．．。」

心底ガツカリした雰囲気を出しつつ、アルフィンの部屋をあとにするセドリックだった。

「．．．．．（はあ兄上）」

少しだけ成長したように思えたセドリックだったが、会えるかも知れないと思った瞬間に精神的幼子に戻りつつあるのは仕方のないことだった。セドリックには家庭教師が付き高度な教育を受けており、アルフィンは女学院に行っているので講師以外での話し相手は二人の兄が主^{おも}だった。

「僕も強くなっ たつもりだったけれども．．．まだまだです。兄上がいないと．．．．．。」

壁に寄りかかって考えてみる。どうやらイレギュラーな出来事に対処するには時間がかかりそうだ。

もう一つ深いため息を漏らした後、自室に戻っていった。

学院生活 4月18日

次の日、朝食を取ってから帝都に行く準備をしていた。すると誰かが寮の玄関に設置されているポストを開ける音が聞こえてきた。自室の部屋を開けるとそこにはリインがいてポストに投函されていた手紙のようなものに目を通していた。

「リイン、どうかしたのか？」

「ああ、アマデウスか。トワ会長からの頼まれた雑用だよ。一、三あるみたいだ。あと旧校舎の探索も・・・これは学院長からか」

「リインはお人好しすぎやしないか？少しは自分を大切にしようが良いのでは？」

「アハハハ、よく言われるよ。アマデウスは今日の予定は何かあるのか？」

と、言ってきたので自分の予定を告げる。

「帝都に行く事が確定している。どうやら妹が私に会いたいらしい。友人を紹介したいとか何とか言っていたので顔を見せに行くところだ」

「？」「ということとはトリスタには終日いないと思ったほうがいいのかな？」

「そうなるかな。だが、予定が早まってトリスタに戻ってきている可能性もある。だから戻ってきていて、手助けが必要になったらいい」

でも連絡してもらっても構わない。ここに帰ってきていなくても、通信で伝えることで何か分かることがあるかもしれないからね。どちらにせよ連絡をしてくれないとどこで何をしているか分からないという事だよ」

「ああ、ありがとう。そのときはそうするよ。・・・気をつけてね？」

さりげない気遣いがリインと言う人物を好評価へと繋げることができるのかもしれない。「行ってくる」と一言伝えてから寮を後にする。

「今日も良い天気だ!!」

帝都に行くのだから晴天であれば良いと思っていたがその願いは通じたようだ。視線を感じるのでその方向を見るとトリスタまで自分を護衛していた戦乙女部隊ヴァルキリーの一人がいた。

「アマデウス様。帝都までの列車の座席をお取りしておりますのでお早めにご乗車願います」

「すまない、助かるよ」

ここで付け加えておきたいのだが、ここトリスタは都会とも言えないような街の一つ。そしてアマデウスの直属の部隊は自身で選別した部隊。そして戦乙女部隊という名前から分かる通り、全ての成員が女性で構成されている。一人一人の戦闘スキルもかなり高い上に美人と来たら・・・。

『おっ、おい!!あの男性の横にいる女性はっ!!』

『・・・ねえ、あなた?何を見ているのかしら。私というものがあり

ながら・・・』

『イテテテテッ、アタタタタッごめんなさい。ゆっ、許してっ・・・。君以外の女性はもう見ないから。あー、そっちに関節は曲がらないって・・・アーツ・・・。』

トリスタ駅の出入り口正面に位置する公園内で若夫婦がデートらしきことをしていたが、突如駅構内から現れた美人さんに目を奪われボーツとする。ゴクツと生唾を飲む音も聞こえてきた。だがその行為は今も駄目な部類に入る。何故なら今はデート中でありなおかつ横には愛妻がいることを忘れていたのだから・・・。

その後の結末は独身者でも分かる通り。この方向に耳は引っ張られても大丈夫なの？と言わんばかりに引っ張られてどす黒く変色しその後、パシーンとエコーがかかるほどのビンタを喰らい曲がってはいけない方向に曲げられて意識を失いかけた男性をズルズルと学院の方角へ引きずっていった。

その一部始終を眺めていた街の人たちは、開いた口が塞がらない状態でただただ呆然としていた。そしてその原因の一部を担っていたであろう二人はさっさと駅構内に入ることにした。その場においても自分たちにはすることはないだろうし、アマデウスが選ばなかったら・・・と言うもの話になるだろうから・・・。

数分後、帝都に行く列車の清掃が終わったのでいち早く中に入って休むことにした。横には護衛の女性も一緒だ。有事の際、護衛が一人で大丈夫なのかと聞かれたら大丈夫だと言うしかない。アマデウス自身も強いし護衛の女性が所属している部隊は、一人一人がそれぞれサラ教官と同レベルかそれ以上の強さを有しているからだっただ。

「やっ聞いん」

「はい、」と報告します。アマデウス様がおられない時に決定すべき案件が数件存在しましたがどれも緊急度が高いものは存在しておりませんでした。後ほど書類で提出しますのでご確認ください」

構内に入るまでは仲睦まじく初々しいカップルを装っていたが、列車の中に入り腰を掛けるやいなや、仕事モードへと移行した。

「うむ、それで隊員の鍛錬の具合は？」

「はい、そちらも万事抜きなく進展しております。殲滅、諜報、防衛その他の展開に応じて臨機応変に対応することが出来ます。ただ・・・」

「うん？ 気になったことはなんでも言ってくれ。秘密にして後で分かった時には一大事のほうがもっと気になるからな」

「戦乙女部隊候補ですが・・・正規隊員との鍛錬の差がすでに出ております。やはりスカウトした彼女らですが魔獣との戦闘は切り抜けるのですが、対人戦闘は恐れや躊躇が見られ勝利確率は五割を切っている状態です。どうすればよいでしょうか？ やはり荒療治でも行なった方が良いでしょうか・・・」

アマデウスと話している女性は戦乙女部隊の隊長を任せられる程の実力を持っているが、書類整理などに難を持ちいわゆる脳筋にやや片寄っている隊員だった。戦闘ではチャクラム4枚を自由自在に操り、敵を殲滅してゆく様は笑う道化などと敵対した人らから揶揄され続けていることに本人は心を痛めている様子だった。

「それは最後の手段として取っておきなさい。候補生も大事に育ててゆかないと正規隊員にまで育つことは無いだろう。実力は少し劣

るにしてもどうして対人戦だったら躊躇が見られるのか、面談することでもしかしたら持っているかもしれない恐怖を軽減できるだろう。カウンセリングを実施するのはどうだろうか？」

「そ、そうですね。私もそのようにするほうがいいと思います。(ふう、残念だわ。あの特訓がまた出来ると思ったのに……)」

戦闘以外の場面では彼女が何を考えているかわかりやすかった。

「(あの特訓やりたいたか思っているだろうな……)」

アマデウスがいない間の事案を事後承諾という形にはなっているものの全て報告を受けた頃、アナウンスが流れて数分後に帝都に到着することがわかった。

「そろそろ着くみたいですね。私はいつものように見えないところから見守っておりますので……。そろそろアルフィン皇女の友人も成長したら美人になること間違いなさそうですね？」

「……君はいつもそうだな。そのことに関してのコメントは差し控えておくぞ。あといつもの仕事に感謝する」

「……勿体無いお言葉、ありがとうございます」

列車が到着するや先に彼女が出て、アマデウスはゆっくりと駅構内へと歩を進めた。

「……数週間しか経っていないのにもっと過ぎたような気分だ。さて時間はまだまだあるが女学院へ行くとしますか」

だが自分に歩み寄ってくる気配を感じたので、そちらの方を見ると

妹と同じ制服を着た少女がこちらに歩いてきていた。

「失礼ですがアマデウス・レンハイム様でよろしかったでしょうか？」

「ええ、そうです。君は？」

「申し遅れました。私の名前はエリゼ、エリゼ・シュバルツァーと申します」

自己紹介の際、スカートの裾をつまみ片足を斜め後ろの内側に引き、もう片方の足の膝を軽く曲げ背筋を軽く曲げて挨拶してきた。

「君が妹の大事な友人であることは聞いている。兄としてお礼を言わせてもらおう」

「いいえ。私も姫様と一緒になれてとても光栄ですし、嬉しく思っております」

ニッコリと笑みを浮かべる笑顔がとても綺麗で、エリゼの事をひと目で妹の友人と言う存在から妹の信頼できる友人にまで格上げしていた。

「……………」

「???どうかされましたか？」

「すまない、見惚れていたようだ」

「……………ふえっ!？」

何を言われたか一瞬分からなかった様子だったが、段々と言われたことの意味を理解して顔を真っ赤に染めた。

「もっ、もう……。アマデウス様は冗談がお好きな様子。(冗談でなかったら……。でも、あれ？姫様から聞いた話によると……)」

〈回想〉

「一つだけ気をつけて欲しいことがあるの」

「それはなんですか、姫様？」

アマデウス様をお迎えに出ようとしていた時、姫様が真剣な表情を浮かべて話しかけてきた。

「兄様は無自覚で女性を褒めることが多いわ。それが同性であつてもその人が性格や人柄などを褒めることをするわ。それも踏まえて覚悟しておいたほうがいいわよ(ニヤニヤ)」

「おっしゃっている意味がわかりかねますが。アマデウス様は褒めるので覚悟する？ようにすればいいのかしら？」

「ええ、概ねその結論で間違っていないわ。ではエリゼいってらっしゃい。私は薔薇園で準備していますね」

とても嬉しそうな、それでいて悪戯が成功しないかどうか伺っている年相応な少女がそこにいた。本当に再会するのが楽しくて仕方がないみたいなお困気を浮かべて。それにしても、姫様に言われた『覚悟しておいてね？』と言つ言葉の意味が分からなかった。分かるまでそれほど時間はかからなかったけれども……。

〜回想終〜

「それでエリゼはどうして駅に来たのかな？」

「はい、ご存知かもしれませんが聖アストライア女学院は貴族子女のみの女学院。サンクト地区に来られる方も、大聖堂と女学院に用事のある方だけ。そこに男性であるアマデウス様だけが来られてしまつと・・・」

「ああ、理解したよ。火のないところには煙は立たぬ。アルフィンと待ち合わせをしているなどと分かった日にはどうなるか・・・。それでエリゼが何かしらの伝言を伝えに来たのかな？」

フムフムと考えてみる。妹に会えるだけで考えていたが、聖アストライア女学院は基本男禁制の園と言ったほうが分かりやすい。それだけでなく女性性は恋愛要素が絡むと途端に強くなる。どこから情報が漏れるのか分からないだろう。

「いいえ、私と一緒にであればあまり目立ちもしないかと・・・」

「と言ひつゝ」

「はい、『こちらの『一時的入場許可書』は当学院の限られた者しか持つておらず、なおかつその限られた者から見て信頼に値する者だけに貸し出す許可書となっています。ですから許可書を持ち私と一緒に歩いている分には目立つこともないと思います。男性がいるだけで異色ですがそれでも・・・」

と、エリゼは一生懸命話してくれる。一目見た時から思っていたことだが真実味が溢れ出ておりとても和やかな雰囲気させてくれた。

「エリゼありがとう。……っとARCUSが鳴った。ちょっと失礼するね」

「はい、お氣にならなすんじや」

一言言ってからARCUSに出る。気にもしていなかったが、帝都は通信が繋がるようだった。通信の相手は我が妹からだった。

『もしもし、兄様ですか？アルフィンです。……そちらに合流しようとしていたのですが、それは無理なようです。申し訳ありませんが、エリゼと一緒に街を回って貰ってもよろしいでしょうか？』

「……それはいいけれどもアル、何かあったの？」

『……ええっと、公務に出なくても良いかと思ったのですがどうやら私が出席しないといけないようなので無視するわけにもいかなくなったのです』

通信の向こうから申し訳なさそうな妹の声が聞こえてくる。悪戯好きな妹の事だから冗談を言っているのかも思ったが、そのような様子も感じることができなかった。その可能性を零にした。しかし台詞の節々に何か違和感が残っていたので追求することにした。

「妹よ。私に何か隠してはいないだろうか？」

「……」

「弁明の余地は一度限りだということと、隠すことはあまり好きじゃないと知っているでしよう？」

「うつつ。公務があることは前々から決まっていた。それでもエリゼに兄様を紹介したかったので公務出席に関して決定を先送りにしたまま当日が来ました。それでもまだ決められずにいましたが、そのツケが回ってきたみたいです。強い口調で出席するようになると言われました。なので兄様が心配するようないことはありません!!」

「ちなみに公務の時間はそれなりにかかりそうなのか？私が出なくても大丈夫なのか？」

「ええ、時間は今日一日潰れてしまふ事になりますが、兄様が心配するようないことはありませんのでどうぞ安心してください。それと兄様には申し訳ないのですが、エリゼの事をお願いしてもよろしいでしょうか？」

「それはどういう事かな？」

アルフィンがアマデウスをお願いしたこの意味を分かりかねたので聞き返した。

「ここだけの話ですが、エリゼは何か心に抱えているようなんです。兄様がエリゼと一緒に居られるだけでモヤモヤしたのも無くなるか、もしくは軽減されると思います。ですから・・・」

「ふむ、なるほどな。ではエリゼに帝都を案内してもらおうという形でいいのかな？了解した。ではアル。ちゃんと公務を果たすのだぞ？」

「ええ、分かりましたわ。ではエリゼによろしくとお伝えください」

そう言うってからアルフィンから切った。そしてアマデウスは『ふう』とため息にも近いひと呼吸を入れてからエリゼの方を向いた。

やはり通信の内容は聞こえていないらしく、「コテンと首をかしげてこちらを見ていたのが印象的だった。

「すまないね。アルはどうも来られないようだ。出席しなくても大丈夫だとアル自身が考えていたようだったが、そうもいつてられない公務が入っていたようでそちらに出席しなければならぬようだ。エリゼには二つ選択肢があるのだが……？」

「それはどのようなものでしょうか？」

指を一本立てて身振りをしながらエリゼに説明する。と言ってもここで別れるか、それとも今日一日一緒に帝都を案内してもらおうかどうかだが、と言う。エリゼの選択は勿論……。

「アマデウス様がお嫌でないのであれば、その……一緒に帝都を回るのは如何でしょうか？」

自分の方が身長は高いので必然的にエリゼのほうが身長が低いことになる。という事は何かを言おうとして視線を合わせればそれはそれでダメージを受ける結果になる。何が言いたいかと言えばエリゼの上目遣いでアマデウスはノックダウン寸前まで迫られていると言うことだ。

「嫌ではないですよ。「こちらの方からお願いしたいぐらいです。私は帝都に住みながらどこに何があるかとか、どこのお店が美味しい食事を出すのかとか知らないのですそこを教えてくださいと嬉しいですよ(ニッコ、これは反則ではないかっ!!)」

アマデウスの心の中で何を考えているかなどとエリゼには分かるはずもなく、エリゼのおすすめの軽食店へ行くことが決まった。数分歩くと男性が一人で入るには気後れするよつなカフェが見えてきた。

入る人、出て行く人を見ても目に入るのは女性のみ……。ここに入るのかと思いつつもとても美味しそうな匂いがしてくるのでエリゼの目的の店がここであると予想を付ける。

「……なんです。男性が入ることはあまりないと思われる場所ですが私も他に行く場所もないので、ここでもよろしいでしょうか？」

「いや、エリゼが思い悩むこともないだろうさ。とても美味しそうな匂いが漂っていて入ってみたい気持ちが湧いてきたよ」

「そ、そうですね!!とても嬉しいです。じゃ、じゃあ入りましょうか」

断られるとも思っていたのか、答えを聞くと嬉しそうな表情を浮かべながらその店へ先導する。アマデウスもそれに続いて店内へ入る。予想に反してあまり女性の姿が見受けられなかった事には安心感を抱く。内装も女性好みに仕上がっているとは言え、男性が入って嫌、もしくは居心地が良くないと言っ感情を持つほどでもない。

エリゼが店のオススメを注文し、アマデウスがその様子を眺めながら他愛もない話をしつつ待っていると数分後には美味しそうな軽食がテーブルの上に並べられた。

エリゼが注文したのはハニートーストに紅茶、アマデウスはシェフオリジナルのコーヒーとサンドイッチ。どちらもこの店自慢の軽食らしい。アマデウスにとっては初めての経験だったのでエリゼの好物とメニューに大きく書かれていた軽食を注文してみた。

「これは……美味しい。このお店は当たりですね。あとで戦乙女部隊の皆さんにも伝えておきましょうか。それとも、もう知っている

だろうか・・・」

一口食べてみて美味しさが口一杯に広がった。アマデウスの好みにピッタリと適合したようだ。そして真正面を見るとハニートーストをほお張るエリゼの姿があり、目と目が合った瞬間に顔を真っ赤にして小さくむせた。

「ど、どっしたのだ？」

「ケホケホ・・・。す、すみません。そのー食べているところを男性の方に見られるのはあまり経験のないことで・・・。」

「そうか。それにしてもとても美味しそうに食べるね。この近くでハチミツが採れるところと言ったら・・・クロスベル地方のアルモリカ村かな。あそこの蜂蜜はとても美味しいと聞いたことがある」

「あっ、アマデウスさんはお詳しいんですね。以前食べた時に聞いたところ、アルモリカ村から仕入れたと聞いたことがあります。(´▽｀)ひ、一口食べますか」なんて同性だったら気兼ねすることなく言うことができるのに・・・。そ、それとも「一口どうぞですか？あーん」って言うのは普通なことなのかしら・・・。いいえ!!断じて違うわ」

アマデウスはエリゼが食べるのを一時中断したので、表情を眺めているといきなり思考顔になりその後真っ赤になって音が出ているのではなかるっかと思うぐらい、首を横にブンブンと振ったりと忙しそうにしているエリゼを微笑ましく見守っていた。

「フフフッ・・・。」

「あう、すみません。私へんでしたね・・・。」

堪えきれずに笑ってしまったアマデウスにやっと気づいたのか、エリゼと目が合いそしてシュンとして床のほうを向く。

「いや、新鮮な・・・自然なエリゼが見られて面白かったよ」

「ううっ!!」

そして少しの間、静寂が戻り時計の秒針が回る音だけが聞こえていた。するとアマデウスの持っていたARCLUSが鳴った。

「おや、またARCLUSが鳴ったか。すまないな、少し失礼するよ」

「ええ、大丈夫です（百面相していたところを見られてしまったわ。可笑しな顔をしていなかったかしら・・・）」

店の中には自分たちしかいなかったが、どんな内容の通信が入るか分からなかったので数歩離れてからARCLUSに出た。

「はい、アマデウスです。ああ、リインか。もしかして何か面倒な事でも起きたかな？」

「っ・・・」

「うんうん、そうか。私は今帝都にいるのだ。旧校舎の探索のメンバーになれないのは少し残念だが、今度誘ってもらって構わないだろうか？私は旧校舎の探索が一度限りで終わるとは思っていないのだよ。これからも数度入る事になると思っているよ。そう言えばリイン、君には・・・ああ、いや何でもないよ。気をつけて入るのだぞ？」

言いかけたことを言わないでいるのはマナー違反だとは思ったが、それでも自分が言いかけたことを言わなかったのは視界の隅に写った少女の肩が小刻みに揺れているのを見たからだ。それでARCSを切ったあと、わざとゆっくりめに歩いてエリゼの元に戻った。

あまり歩いてもないが近くまで来るとエリゼが振り返りニコツと笑いかけてきた。

「「」学友からの通信と思われましたが、何か急用でも出来ましたか？」

「ええ、お人好しなクラスメイトが生徒会長から数件の手伝いを貰ったそうで、その中の一つに学院長からの旧校舎探索と言う要望があったみたいです。それでその探索メンバーにどうか？と言われたのですが、最初から帝都に行くと言いましたがまだ帝都に滞在していることを伝えたくです」

「そ、そうでしたか……」

また会話が無くなり静かになる。その静かさを破ったのもエリゼだった。

「聞かないのですか？」

「そうですね。私が妹と話をしていたら羨ましそうな表情を浮かべてこちらを見ていたり、先ほどの通信の相手の名前が出てきた時に動揺していた事でしょうか？いいえ、私は根掘り葉掘り聞こうとしたりしませんよ。妹からはエリゼの力になってくださいとは言われませんが、嫌がることを無理やり聞こうとは紳士の行なう事ではありませんので……」

『羨ましそうな・・・』や「動揺していた・・・」などの辺りで『あうあう』と言葉にならない悲鳴のようなものを上げていた様子が可愛いなどというのは胸に秘めておこうと思ったアマデウスだった。

「いめんない・・・」

「謝られるような事は何一つしていませんか？・・・ここを出ましようか。公園にでも行って気持ちを落ち着けましよう」

じわりとにじみ出た涙を見たアマデウスは店を出ることを提案し、エリゼもそれに同意した。時間的にも他のお客さんが来そうな時間だったからだ。エリゼの様子を考慮した結果、マーテル公園に行くことにした。ちょっとした裏技を使って隣接するクリスタルガーデンを貸し切った。エリゼは俯いたままだったのでそのことには気づいていない様子。

「久しぶりに来たがここは良い所ですねー」

「・・・」

無言なままで会話は無かった。ここまで来る途中でも曖昧な相槌はあったものの、会話らしい会話は一つと言えども無かった。クリスタルガーデンに設置されているベンチに座ったもののどうにかして正気に戻す必要があった。

それには少しの羞恥と勇気が必要だった。

「よじっ！！エリゼっ？」

「はい・・・？きゅっ！！」

アマデウスがやったことは単純明快だった。いつも妹の機嫌を損ねるとやっていたことで、お姫様抱っこだ。これを妹以外にやろうと考えたのも実行したのも初めてだった。行なった後で恐る恐るエリゼの顔をまじまじと見た。怒っていたり呆れていたりはしていなかった。ただ……。

「……………(パクパク)」

アマデウスの腕の中で茹でダコな状況で硬直はしていたが……。やったあとに少しだけ『やらなければ良かった』と本当に少しだけ思った。それよりも可愛いと言っ感情が上回っていたが。

そこから回復するまでに数十分かった。その間ずっとアマデウスはお姫様抱っこをやめようとはしなかった。

「も、もう大丈夫です。おろして頂けませんか？」

「そうかい。分かった……」

アマデウスはかなりの時間腕を酷使していたようだったが疲れを見せることなく、エリゼを軽やかに下ろした。先程までの無表情な顔はどこに行ったのか、今はニコニコした表情をしていた。アマデウスが考えていたような下ろした瞬間にビンタをされるとか、無視されて帝都での休日があったたまれないもので終わるなどということはない。だったので内心ホッとしていた。

「ありがとうございます、アマデウスさん。おかげで私の中で色々区切りのようなものも付いたと思います。お気づきのことと思いますが、私には兄がおります。その事でモヤモヤした気持ちを抱えていましたが、今回のことでそれも軽減されたように思えます」

「そう。本当に良かった。いきなりあんなことをしたから平手打ちをされるのかと焦っていたからね……」

「ええ、もうお別れの時間が来てしまったようです」

クリスタルガーデンから外に出ると太陽は夕日へと姿を変え、一日が終わろうとしていた。それは楽しかった時間に終わりが来たことを暗に伝えているようだった。

「また……会えますよね？」

「ああ、君が再会を望みそして私もそれを望むなら……」

「子供っぽいと思われるかもしれませんが、指切りをしていただけませんか？」

「勿論」

アマデウスはしゃがんでエリゼと視線を合わせそれから指切りをした。その後するりと解けた指を名残惜しそうな様子で見っていたエリゼの反応に、優しい気持ちになりつつ帰路に着くことにした。エリゼには戦乙女部隊から一人護衛をつけ万全の体制を整えさせた。

アマデウスにとってもこの休日はとても充実したものとなった。明日から再開される学院生活に思いを馳せながら列車に乗り、トリスタに戻っていった。

〈寮での一幕〉

「おかえり。帝都どうだった？」

「ああ、リインか。帝都楽しかったよ」

少し浮ついた様子に気づいたのかリインがそこを追求してくる。

「行く時と違う顔をしているようだが……。帝都で何か良い事あった？」

「妹の友人と一緒に軽食を取りその後、マーテル公園内にあるクリスタルガーデンでその友人と語り合った。……。あまりしたことのない経験だったから浮ついた顔をしているのかもしれない」

アマデウスは自分の顔を引っぱり張ったり軽く抓ったりしたが、触ってみると熱を帯びているのが分かった。風邪をひいたわけではないので理由はすぐに判明した。だが疲れて体調を崩したのかと心配するリインに本当の事を言うことも出来ずに大丈夫だと言うに留めていた。

「顔、赤いぞ。帝都で遊び疲れて風邪でもひいたのか？明日からの学院生活に支障がでないといいな」

「ホントに大丈夫だ。原因は判明しているし、遊び疲れたことによるわけでもない。一晩寝たら明日は元気な顔を見せるから……。。(リインの妹ってエリゼだね。今は確執があるみたいだし今日会っていたのがエリゼだとか言いつらい)」

心底心配するリインを振り切り、自室へと戻る。壁に備え付けられている鏡を見るとニヤけた表情を浮かべている自分の姿が写った。どうにかしてこの顔を普段に戻さないといけないと思ったので、水浴びをしてから横になることに決めたアマデウスだった。